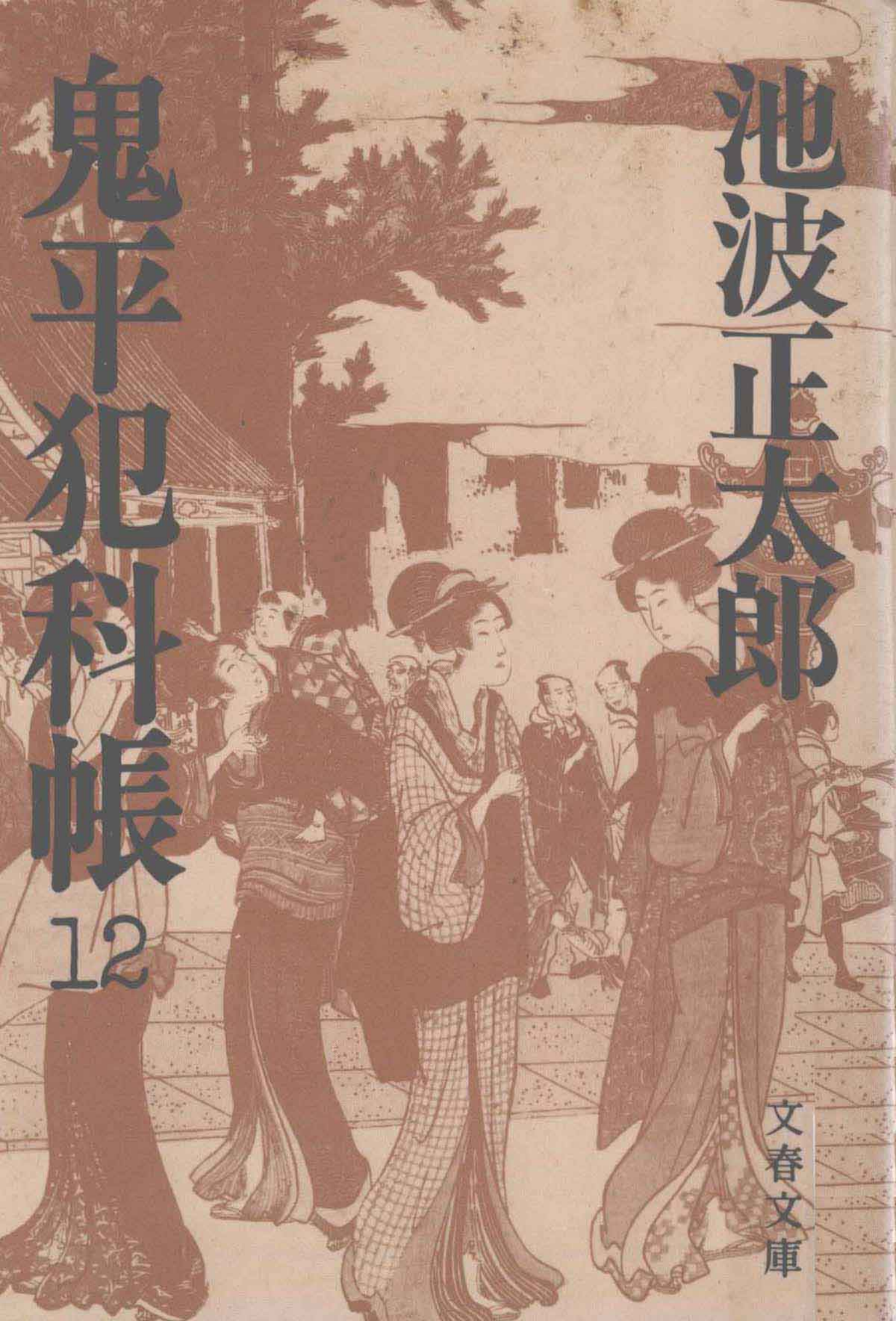

池波正太郎

鬼平犯科帳 12

文春文庫

文春文庫

鬼平犯科帳(十二)

定価はカバーに
表示してあります

1983年1月25日　第1刷
1990年3月5日　第14刷

著　者　池波正太郎
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16 714230 9

文春文庫

鬼平犯科帳
(十二)

池波正太郎

文藝春秋

目次

いろおとこ　7
高杉道場・三羽烏　50
見張りの見張り　112
密偵たちの宴　158
二つの顔　198
白蝮　243
二人女房　290

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鬼平犯科帳（十二）

いろおとこ

「先生。また一人、殺ってもらいたいのですがね」
「それで？」
「お礼の、金高のことで？」
「ふむ……」
「ここに二十五両ございます。受けておいておくんなさい」
「半金だな」
「さようで」
「受けとる前に、殺す男の名を尋いておきたい」
「お尋きなすったあとで、ことわることもおあんなさる……？」
「めったにはないが、な……」

「ようございます。申しあげましょう」
「どこの、だれだ？」
「火付盗賊改方の……」
「鬼の平蔵を殺るのか、それならば百両の仕事だ」
「ほう……百両出せば、長谷川平蔵でも、お殺んなさる？」
「百両なら、な」
「こいつはいいことをうかがいました。よく、おぼえておきましょうよ」
「平蔵ではないらしいな。だれを殺る？」
「同心をつとめている寺田金三郎という者を、ね」
「同心、だな」
「理由は尋かずにおいて下さいまし」
「よし。引き受けよう。この二十五両は、もらっておく」
「先生が引き受けておくんなすったからには、もう安心だ。ありがとうございます」
「おぬし……その盗賊改メの同心に、一命をつけねらわれているらしいな」
「さあて、ね……」
「で、期限は？」
「そりゃあもう、早いにこしたことはない」
「その、同心の寺田某が、どうやら、おぬしの居所を嗅ぎつけそうになって来た。ちがう

か？」
「さあて、ね……」
「十日、待て」
「よろしゅうございます」
「後金の二十五両、用意をしておけよ」
「ごらん下さい。このとおりで……」
「うむ。たしかに、見た」

一

その日の夕暮れに、盗賊改方同心・寺田金三郎は、本所二ツ目の軍鶏鍋屋〔五鉄〕で酒をのんでいた。
雪催いの、底冷えの強い日だっただけに、五鉄の入れ込みの座敷には、早くから客がつめかけてい、軍鶏を煮る鉄鍋の熱気がたちこめ、汗ばむほどにあたたかい。
「おや……あれは、寺田さんじゃあねえか。いつの間に来ていなすったのだ？」
と、五鉄の亭主・三次郎が、板場の格子の内から、入れ込みの片隅で黙念と盃をなめている寺田金三郎を見つけて、女房に尋いた。
「あれ、ほんとだよ、寺田さんの旦那だ」
「何か、御用のすじで出張っていなさるのかな……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「さあねえ」
三次郎は、庖丁を置いて、二階の小部屋へあがって行き、寒いので日中から泥行火を抱いてばかりいる老密偵・相模の彦十へ、
「下に寺田の旦那が来ていなさるよ」
と、声をかけた。
女密偵・おまさが、大滝の五郎蔵と夫婦になり、寄宿していた〔五鉄〕から去ってのち、相模の彦十はおまさに替って此処を塒にしている。
彦十は掻巻にくるまったまま、
「妙だぜ、そいつは……」
「何が？」
「寺田の旦那、今日は非番のはずだよ」
彦十は、寺田同心と組んで、これまでに何度か探索をしたことがあるので、寺田金三郎の日常はよく知っていた。
「非番の日に、四谷坂町の組屋敷から、わざわざ本所へ出かけて来るというなあ、妙なはなしだ」
くびをかしげる彦十へ、三次郎が、
「何か、御用のすじではねえかえ。むずかしい顔をしていなさるよ」
「ふうん……」

「爺つぁん、行って、酒の相手をしてやったらどうだ？」
「ま、かまわねえほうがいい。旦那方は、人それぞれで、みんなちがった思わくがあらあ」
「そういうものかね」
「ま、一服して行きねえ。昨日、まあちゃんが、いい煙草をとどけてくれてよう」
五郎蔵おまさの夫婦が、義父の舟形の宗平に小さな煙草屋をやらせていることは、三次郎も知っている。
「なるほど。こいつは、うめえ薩摩煙草だ」
三次郎は部屋へ入って来て煙草を吸いながら、
「あの、寺田の旦那は、気むずかしそうなお人だね、爺つぁん」
「そうさな。まだ、この御役目についてから一年そこそこだから、板につかねえところがあるのは仕方もねえことよ」
「へへえ……一年そこそこ……」
「あの人の兄さんが、寺田又太郎といってね。去年の……そうさ、ちょうど今頃だ。鹿熊の音蔵という盗人を見つけ、後をつけたとおもいねえ」
「ふむ、ふむ……」
「ところが、鹿熊の音蔵のほうが一枚上手でな。寺田又太郎さんは、中目黒の竹藪までつけて行って、そこで音蔵に殺されなすった……」
「へへえ……そいつは、はじめて聞いた」

そのとき、瀕死の重傷を負って竹藪に倒れていた寺田又太郎を発見したのは、土地の百姓であったという。

その百姓に、又太郎は、

「おれは、盗賊改メの、寺田又太郎……鹿熊の音蔵という盗賊に、殺された、と、御役宅へ、とどけてくれ、たのむ……」

そこまでいうのが精一杯のところで、がっくりと息絶えた。

又太郎は背中、胸、腹に五カ処の傷を負っていた。これはどう見ても一人の犯行ではない。

又太郎の変死によって、弟の金三郎が寺田家をつぎ、ひいては兄同様の役目に就いたわけである。

「あの、寺田金三郎さんはね。剣術のほうは大変なものらしい。いつか、鉄つぁん……いやさ、長谷川平蔵さまがいっていたっけ」

「何と、ね？」

「盗賊改メの中でも、真剣を抜いて斬り合って、おれを打ち倒せる見こみがあるのは、沢田小平次と寺田金三郎ぐらいなものだろうってね……」

「そんなに強いのか？」

「おらあ、まだ、見たことはねえがね」

寺田金三郎は、亡兄の跡をつぐや、本所の見廻りを受けもたされた。本所はほかに同心・木村忠吾が深川と合せて見廻りを担当している。

長谷川平蔵は、経験の浅い金三郎を、木村忠吾や相模の彦十、そして自分が引きまわしてやり、盗賊改方という特殊な役目の勘所をおぼえさせようとしていたのであった。

それゆえに、金三郎は〔五鉄〕ともなじみになっていたのだ。

「それにしても、よ……」

と、相模の彦十が、

「あの、寺田さんの兄弟はまったく、よく似ていなさる。顔つきが、よ」

「へへえ……」

「へへえ、へへえと感心してばかりいねえで、おらにもいっぺえ、もって来てくんなよ」

「よし、よし」

「こいつ、大人ぶった口をきくねえ。むかしは、おめえをおぶってやって、小便を引っかけられたこともあるんだぜ」

「どうも爺つぁんと長谷川さまには、かなわねえや」

「あ、ちょいと……」

「え？」

「寺田の旦那が、どんなにむずかしい顔をしていなさるか、ちょいと板場から、のぞいて見ようか」

「いいとも」

彦十は、板場へ下りて行き、格子の間から入れ込みの一隅にいる寺田金三郎を見た。

当年二十五歳。亡兄・又太郎より五歳下の独身だが、麻布飯倉片町にある念流・笹原喜十郎の道場へ十歳のときから通いつめ、すでに免許をゆるされていた。

背丈は尋常だが、いかにも剣士らしく引きしまった体軀のもちぬしで、眉のあがった精悍な風貌をしている。その躰つきや、浅ぐろい顔だちなどが、亡兄に、

「似ているともなく似ている……」

のである。

生まれたときは瓜二つといわれたが、成長するにしたがい、兄弟のすすむ道が異なって来たので、自然、その影響が顔かたちにもおよぶこと、いうをまたない。

その又太郎は、亡父の跡をついで御先手組・同心となり、むろん、剣術もやったが、一通りのことだし、どちらかといえば色白で、細身の背丈が高かった。

母親が亡くなってのち、父が後妻をもらわなかったので、又太郎は、ただ一人の弟金三郎の面倒を、

「実に、よく見てやっていたものだ」

と、組屋敷内でのうわさが高かったことを、長谷川平蔵も耳にしている。

それだけに寺田又太郎は、役宅内でも取り分け温厚な性格で、三つ四つは老けて見られた。

いたずら者の同僚・木村忠吾なども何かというと弟金三郎同様に無口な又太郎へ相談をもちかけていたようだし、非番のときの遊びの金を借りたりしていたらしい。

だから、寺田又太郎が殺害されたときは、あの剽軽者が、歯を喰いしばって、

「男泣きに泣いた……」

と、いうことだ。

それにも増して又太郎の死を悲しんだのは、弟の金三郎である。

金三郎は、三日ほど食を絶った……というよりも、食物を口が受けつけぬほどの悲しみであった、と、いったほうがよい。

又太郎の通夜から役宅へもどって来た平蔵が妻の久栄に、金三郎のことを、

「あれほどの剣術つかいが、女々しいまでに泣きくずれていたわ。平常は無口な男と聞いていたが、胸の内は情のこまやかな、熱い血がながれているやつにちがいない」

そう洩らしたとか……。

金三郎は、兄の庇護をうけつつ、尚も修行を積み、ひとかどの剣客になるつもりであった。

そこで平蔵が、又太郎亡きのち、金三郎を役宅へよび寄せ、

「剣の道ひとすじに進みたいと申すのなら、それもよい。おれにも考えがあるが、どうじゃ？」

問うたところ、寺田金三郎は、一も二もなく、亡兄の跡をつぎたいとこたえた。

亡き寺田又太郎には、お篠という妻と小吉といって五歳になる男の子がいた。この二人を、そのまま引き取り、小吉が成長したのちは、自分の養子として寺田家をつがせたい、と、金三郎はいった。

「それもよいが、お前も、いずれは妻をめとることになろう。男子も生まれようし、そうなったらどうする？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com